

森鷗外文芸評論の研究
(二)

「小説論」の論理

「小説論」は、すでに拙稿「森鷗外文芸評論の研究(二)」^(注1)において取り上げたように、のち「醫」にして小説を論ずる・「醫學の説より出たる小説論」と、再度にわたって題名を変えており、また、本文もかなり改変されている。にも拘らず、改変されたのは概ね著者の立場を説明している部分であって、文学なり小説なりに対する著者の考え方は、多少の語句の変更はあっても、その論旨の大筋は変わっていないと言えるであろう。そこで、本稿では論理の展開を検討しながら、著者鷗外の考え方や意図するところなどを探ってみたい。

不易なるべし。又、千変万化する物は自然の理也。變化にあつたれば應あつたらず。是に押うつらざと云ふは、一端の流行に口實時を得たるばかりにて、その誠を實地せるゆへ也。せめず、心をこらざる者、誠の變化をせる事なし。たゞ人にあやかりてゆゑ也。

嘉部嘉隆

容れよ。一步自然に。理也。

又、快楽の真樂非樂。非樂と爲すは、荷爾ノ云々のあるのみ。是は、獨り多し。斯くの類を、爲すは、斯くある。斯人の即時に、其の平生に、一時

いくつがあるようである。(主^五)。これら先学の研究を視野に入れ、参照しながら論をすすめてゆきたい。

「小説論」は、鵬外の文学の出発点であった。神田孝夫氏は「その二日後から幕を切つて落される旺んな文学活動に對して、予め道を安全ならしめる意もあつたろうと思はれる」と述べている。それにしては奇妙な論である。小堀桂一郎氏は「自然主義の文學觀がまだ存在しなかつた明治二年という時期にあつて、これはいつたい如何なる風潮を念頭に置いて書かれたものだらうか」と、その意圖を問題にしている。

それでは「小説論」が発表されたことに對して、何らかの反響はあったのだろうか。筆者は、未調査なので確実なことは言えないが、ほとんどあるいはまったくなかったのではなからうか。既成の鵜外研究文献目録中には全く入れられていないが、これらにはあるいは見落しもあるかもしれないので、全面的に頼るわけにはいかない。しかし、「小説論」の内容から考えても、反響があるようにには

思えないのである。

「小説論」は小永井小舟の永坂石埭を送る序の引用から始まる。そして次にこの小永井小舟の考え方を否定した上で、

余が醫にして小説論を呷するは此の如く淺薄なる意匠に基くにハ非ざるなり知ずや今日歐洲諸國に瀰漫する一派の小説は實に其源を醫學に發したるを

と本論に入つてゆく。このあたりの導入は、自らの論を高く位置づけようとする意図が露骨に読みとれる。

このあと、すぐ

讀者諸君は既に「エミール、ゾラ」の名を聞きしならん「ゾラ」は法蘭西「プロワンス」の人、現時の所謂自然派（「ナトユラリスムス」）の碑史ハ其創作せる所にして其自ら命じたる實驗小説（「リヨ、ロマン、エキスペリマンタル」）の名は開明世界に噴々たり

と続く。「エミール、ゾラ」の名を聞きしならん」と、讀者がゾラの名を知っていることを前提にしているかのような論の進め方である。（もともと、知らなくとも読んでいるうちに自然にわかるわけではあるが）そして「開明世界に噴々たり」るゾラの実験小説の名を提出し、さらに

此實驗小説の語は「ゾラ」が資て小説論の第一篇の題目となしたる所にして蓋し之を法蘭西著名の生理學者「クロウド、ベルナル」の著したる實驗醫學諸論に取れるなり

と、実験小説ということばの成り立ちを説明する。このあたりは、

いわば事実の叙述に過ぎないが、このあと実験の内容と実験小説の内容にわたる説明になる。まず、

「クロウド、ベルナル」は曰く今の學問は視察（「オブセルワツション」と實驗（「エキスペリマンタション」）との二に基くなり宇宙間にて人力の能く變化すべからざるものに達へば學者、之を視察し其能く變化すべきものに達へば學者、之を實驗す醫、若し活人牀の作用の本眞を悟らんと欲せば其視察の功を補ふに實驗の績を以てすべし彼の病院、講堂及び試験室の内に入て生活の臭穢蠕動の疆界（「フエチード、ウー、バルビタン」）に臨むに非ざるよりは眞正の醫學の發明を得べからざるは恰も銀燭、光を放つの廣度に入るものゝ先づ庖厨を過ぐるが如しと

と、觀察（「視察」ということばは、再稿以後「觀察」とかえられてゐる）と實驗について、その相異を一応説明したあと、後半は觀察と實驗の効用が輝かしい医学上の業績を導き出すことを述べる。この部分は、神田孝夫氏や、特に小堀桂一郎氏にくわしい研究があるが、それによると「ゴットシャルの『文学上の死響と生問』(Literarische Totenklinge und Lebensfragen. 1855) とうる評論集に拠つてゐることである。この引用の前半「クロウド、ベルナル」ハ曰く……之を實驗す」まではその二一九頁、「醫、若し活人牀の……如しと」まではそれより三頁ほどあとにある記述を要約訳出したものと小堀氏は指摘している。そして小堀氏は、この鵬外の要約した紹介を「彼は前半はゴットシャルがすでに要約

したものを、後半は直接話法で引用された獨譯文を利用してベルナルの『實驗醫學序説』の中心思想を、かなり荒けずりにはあるが手際よく紹介している」と述べる。たしかに「ゴットシャルがすでに要約した」思想を「手際よく紹介している」かもしれない。しかし、この程度の記述で当時の人々に何がわかっただろうか。現在でも、この鵬外の文章を読む者は、無意識に自らの知識で、説明不足の部分を補って読んでいるのではなからうか。

たとえば、「今の學問は視察（略）と實驗（略）との二に基くなり」は、學問の方法を述べていることがなんとかわかるが、「宇宙間にて人力の能く變化すべからざるものに逢へば學者、之を視察し其能く變化すべきものに逢へば學者、之を實驗す」となると、対象によってその方法を使いわけるところまではわかるものの、方法そのものはことばとして出て来るだけで、どのようなものかは必ずしもわからない。また、対象の相異点も「宇宙間にて人力の能く變化すべからざるもの」「其能く變化すべきもの」だけでは具体性に欠け、単にことばが否定と肯定とで使いわけられ、形式上対立しているということがわかるだけである。「實驗」などは、鵬外が実際にドイツにおいて、研究生活を送り経験して来ているため、だれにでもわかる概念と錯覚してこのように説明不足になつてしまつたのではなからうか。この部分はクロード・ベルナルの『實驗醫學序説』それもゴットシャルの著述からの間接的な紹介である。だから、「實驗」の定義や説明もゴットシャルに従つているといえばそれまでかもしれない。しかし、かりに誰の著述に拠

つているとしても、内容がわかつてこそ紹介する価値があるわけでも、もともとの説明そのままを日本語に置きかえたというだけでは済まされないであろう。ゴットシャルの著書の紹介は、このあと三ページがとばされてしまつていふという。あるいは、實驗と觀察との差異がもう少し詳しく説かれていふのかもしれないが、筆者は未調査なので何とも言えない。

「醫、若し活人拯の……實驗の績を以てすべし」は、これに続く「彼の病院……如しと」の部分で言いかえられている。「病院、講堂及び試驗室の内」が「生活の臭穢蠕動の疆界」であるような書き方である。（クロード・ベルナルの発言とは、ちよつとニュアンスが異なる）それはともかく、「若し活人拯の……實驗の績を以てすべし」も、厳密に論理的に見れば、やや曖昧なところがある。

「欲せば」と順接の仮定条件でつながれているわけであるが、これは裏返せば、觀察と實驗を行えば必ず所期の成果に到達できるともとれる。觀察と實驗は研究の方法なのであるから、この方法をとるから必ず所期の成果を得ることができるとは限らない筈である。しかし、ここではあとの部分とのつながりから判断しても、觀察と實驗とが必ず何らかの成果をもたらすかのような書き方になっていると言えよう。とすれば、この節の前半と後半とでさえ、必ずしも論理的なつながりがあるとは言えなくなる。

むろん、この節は「クロード・ベルナル」曰く……如しと」と、ベルナルの發言を直接法で紹介する形式を取っている。従つてそれを紹介している鵬外には責任のないような書き方になってい

るが、実際には鷗外によって要約された紹介なのであるから、紹介のしかたによっては、当然要約のしかたも問題になる。つまり、要約するに際して、なぜ論理的につながらないものを並列的に置いてしまったかということになる。本来、要約されない原典は論理的につながっていたのに、要約されるに際して、論理的つながりは要約者の頭の中だけに置き去られたのか、それとも、もともと論理的なつながりがなかったのか。そのいずれにしても、要約者鷗外が並列的に置いてしまったのである。これは鷗外の論理構造にかかわるといえる。

「恰も銀燭……如し」は比喩である。この比喩はクロード・ベルナールとしては得意気に書き添えているが、必ずしも適切と言えない面もあるように思われる。^(注10)この短い論の中に、このような比喩を、ことばの定義をはぶいてまでわざわざ入れる必要があったのかどうか。ともあれ、以上が『実験医学序説』の鷗外なりの紹介である。(ゴットシャルを通しての間接的な紹介ではあるが)そして、このあとこのベルナルの著述をゾラに結びつけようとするわけである。これに続いて鷗外はゾラの小説を取り上げる。

「ゾラ」ハ直ちに此言を擧げて之を小説の結構に應用したり其書中の事物ハ皆な「ゾラ」の分析と解剖とを経たり「ゾラ」の人情を分析するや湯液の酸澗を擇ばず其世態を解剖するや刀鋸の鈍鋭を問ふことなし而して此分析、解剖の順序を叙列したるものハ其所謂「エトユウド」なり其所謂碑史なり

この部分は前節の「実験医学序説」の紹介の部分を受けて、ゾラ

の小説の特色に説明を及ぼしている。とは言えこの部分も具体的に何も言えていない。「其書中の事物ハ皆な「ゾラ」の分析と解剖を経たり」と言うが、「分析」とか「解剖」とかいうことばが出て来るのも、まさに唐突である。鷗外は自らの意識の中で、観察・実験と分析・解剖とを結びつけているのだから、一般の読者が鷗外と同じような思考過程をたどるかどうか。分析などということばは、むしろ実験の手段と考えられるが(のちに「化学所」などということばが出て来て、これに対応するものとして「分析」が考えられるということもある)、そのように考えると、「其視察の功を補ふに實驗の績を以てすべし」の「視察」の部分が切り捨てられたことになる。「實驗小説」だから実験の手段だけを取り上げればよいことなら「此言を擧げて……應用したり」は応用の仕方が不十分ということになるし、鷗外の説明もまた不足である。

それはともかく、この部分に続く「ゾラ」の人情を分析するや湯液の酸澗を擇ばず其世態を解剖するや刀鋸の鈍鋭を問ふことなし」も、きわめて抽象的な議論である。「人情を分析する」とはどういうことなのか、「世態を解剖する」とはどういうことなのか、何となくわかるようでありながら、実際にはつかみどころのない表現である。また、これだけではゾラの小説における人情・世態の把握が、他の小説家とどのように異っていたかという説明にもなっていない。「人情を分析するや湯液の酸澗を擇ばず」「世態を解剖するや刀鋸の鈍鋭を問ふことなし」と、「分析」が出て来たことで「酸澗を擇ばし」、「解剖」が出て来たことで「刀鋸の鈍鋭」と比

喻に逃げこんでしまつて、^(注11) まともにゾラの小説を把握しようとはしていないのである。

「人情の分析」「世態の解剖」ということばを使ったその引続きとして、「此分析、解剖の順序を叙列したるものハ其所謂『エトユウド』なり其所謂稗史なり」とのべてこの節を結んでいる。「分析、解剖の順序を叙列」したなどという表現も、どのようにでも解釈できるあいまいなものでしかない。

この節について、論は次のように続く。

「ゾラー」は此應用の論を吐いて能く自ら之を實行したり試に其前後二十種と預定したる「レー、ルゴン、マカルド」の大著述を見よ「ルゴン」の福と題せる首巻より土地と題せる新篇に至るまで實に化學所の日記に非ざれば則ち解剖局の週報なり

この節の冒頭の文は、前節の冒頭の一文と實質的に同じと言えよう。とすると、前節の説明を具体的な作品にあてはめようとしているとも解釈できる。しかしここでも、實質的には説明が全くできていない。「實に化學所の日記に非ざれば則ち解剖局の週報なり」とは一種の比喩である。ゾラの作品のどのような点がどうして「化學所の日記」なのか「解剖局の週報」なのかの説明されていないかぎり、鵬外のこの論は空論でしかない。その上、一般の読者にとって、「化學所の日記」「解剖局の週報」そのものが具体的にどのようなものであるかわからないのではあるまいか。鵬外のような立場の者にだけわかる比喩を、小説を論じる論中に用いることもいささか不適当と思われる。もちろん、表現そのものの妥当性だけではな

く、ゾラの小説を「化學所の日記」「解剖局の週報」ととらえること自体も問題であらう。前稿でも引用したが、吉田精一氏はこの点についての鵬外の無理解を指摘している。少くとも鵬外がゾラに対して十分な理解を持った上でこの論を展開しているとは考えられない。理解が不十分だからこそ、何とでも解釈のできる抽象的な表現と必ずしも適切でない比喩に逃げこんでいると考えざるを得ないのである。

この部分に続いて、次に「ナナ」が論中に持ち出される。

然れども化學所、解剖局ハ人、鼻を掩ふて之を避け「ゾラー」の小説ハ人、目を織くして之に就く其故何ぞや彼、鏡前に千萬種の嬌態を弄する赤條々の淫婦「ナナー」が生氣鬱勃たる活肉ハ色褪め膚冷えたる解剖案上の刑屍とハ同一視すべからざればなり

この部分の、前節との論理的なつながりは必ずしもはっきりしない。たとえばゾラの作品が「化學所の日記」「解剖局の週報」であれば、その内容が「生氣鬱勃たる活肉」を描いているということとは矛盾していないだろうか。「化學所、解剖局ハ人、鼻を掩ふて之を避け」るのならば、「化學所の日記」「解剖局の週報」に人が興味を示すはずもあるまい。従って、「化學所、解剖局ハ人、鼻を掩ふて之を避け」「ゾラー」の小説ハ人、目を織くして之に就く」は、いわば現象の説明であり、「其故何ぞや」以下は、その現象の理由の解釈ではあるが（そしてこの節の前半後半はつながるが）しかし前節とは論理的につながらないと言えよう。論理的につながるとはな

錯覚を起すすれば、それはこの節のはじめに「然れども」という逆接の接続語が来ているためであらう。

さて、鵬外の論はさらに進む。

夫れ分析と解剖とハ之を小説の結構に用ゆること固より不可なるなし然れども「ゾラー」の直に分析、解剖の成績を以て小説となすハ諸家の妥當ならずとする所なり蓋し實驗の成績は事實なり余輩醫人ハ事實を求むるを以て足れりとすれども小説家ハ果して此の如くにて可なるや

この部分は大きな問題を含んでいる。「夫れ分析と解剖とハ之を小説の結構に用ゆること固より不可なるなし」というが、なぜ「固より」なのか。「分析」「解剖」ともにもともと自然科学の概念であり用語であらう。それを何らの定義もせず、既知の概念として文学への適用を述べている。さらに「ゾラー」の直に分析、解剖の成績を以て小説となすハ諸家の妥當ならずとする所なり」という記述において、「分析、解剖の成績」と称する具体的には理解できない観念が持ち出されて来るのである。これが自然科学における実験についての用語であれば、このままで通用するかもしれないが、自然科学の用語をそのまま文学作品の創作の問題の論議に、定義ぬきで用いて、具体的に理解させようとする方がむしろであらう。鵬外はそのむりを承知の上で、あえて自然科学の用語を文学上の用語にすりかえたのである。それとともに、ここにはのちに鵬外の議論の方法として常套手段となる「諸家」という、抽象的な内容のわからない権威者が登場している。それはさておき「蓋し實驗の成績は事實

なり」と言うとき、鵬外は自然科学と文学を全く同列に扱ってしまっているのである。自然科学の實驗における結果として事實が導き出されるとしても、文学の創作において、実験小説的方法をとることが事實を導き出した、事実を扱うということは、これまでの鵬外の論議からは出て来ないのである。鵬外は自然科学の用語を文学論に用いることにより、文学の問題をあたかも自然科学の問題と同様に扱えるかのように論をすすめ、そして自らの都合のよい結論に持ってゆこうとしているのである。つまり「余輩醫人ハ事實を求むるを以て足れりとすれども小説家ハ果して此の如くにて可なるや」ということになる。この部分は、むしろもう少し先の結論を導き出すために必要なところである。

この節に続く、

「ゾラー」の所謂、無慙なる事業は人を嚇すべき畫圖ハ之を正史に見るときハ必ずしも厭はず支那炮烙の刑、西班牙「アウト、ダフェー」の惨も正史なれば讀むべきなり彼の日常の新聞に記載せる殘酷臭穢の行ひも亦た然り顧ふに事實なるを以ての故のみ

という一節は、前後のつながりがはっきりしない。この節という事實が、前節の「實驗の成績は事實なり」という、その事実の具体例なのだろうか。それにしては「正史」や「日常の新聞に記載せる殘酷臭穢の行ひ」では、「實驗の成績」とは言いにくい。ここで「事實」を持出すのは、次の節に出てくる「事實」の前提になるわけだが、鵬外としては「實驗の成績」としての「事實」では具体性を欠

くので、ゾラを持ち出して「『ゾラー』の所謂、無慙なる事業」と、ゾラで続けておいて、ここに「事實」ということばを並べることに
よって「事實」の内容をすり替えるためではなからうか。
これに続いて結論の節が来る。

小説家ハ果して此の如き事實の範垣内を彷徨して満足すべきや
若し然りと曰はゞ何の處にか天來の奇想を着け那の邊にか幻生
の妙思を施さんや分析、解剖の成績ハ作家の良材なり之を運轉
使用するの活法は獨り覺悟（「イントユイション」）に依て得べ
きのみ

この部分は、論としては一応筋が通っている。「覺悟」などとい
う、ややわかりにくい訳語が用いられているが、三稿ではこの節全
体が、

小説を作るもの若事實を得て満足せば、いづれの處にか天來の
好想を着けむ。事實は良材なり。されどこれを役することは、
空想の力によりて做し得べきのみ。

と、きわめてわかり易くすっきりと変えられている。そして鷗外の
言わんとすることは、初稿においてさえもはつきりしている。^(注12) 現在
の時点からすれば、この鷗外の言わんとしていることは当り前の話
であらう。あらたまつて議論を展開するほどのことではあるまい。

小堀桂一郎氏によれば、この鷗外の論は坪内逍遙の『小説神髓』
が念頭にあったのではないかということである。「人情」「世態」
などという鷗外のことばづかいを考え合わせてもこの考え方は肯う
ことができる。詳細は小堀氏の論に譲るとして、逍遙の行き過ぎを

鷗外がたしなめ引き戻そうとしたということは十分考えられる。し
かしむしろそれだけが目的であつたのではなからう。「開明世界に
噴々」たるゾラを紹介し、その上でこれを否定する。さらにクロイ
ド・ベルナルまで持ち出し、医者としての（つまりは素人として
の）立場も強調し、にも拘らず文学に対する造詣が深いことを読者
に披瀝し、文学を論じることが決しておかしくないことを示すので
ある。日本でようやく知られ出した「開明世界に噴々」たるゾラを
持ち出すことは、ヨーロッパ文学の知識を誇示することになり、そ
のゾラを否定することは、論者の見識を示すことにもなる。文壇に
初登場するには効果的な方法といえよう。實質的には常識的な結論
に過ぎないが、方法としては後の鷗外の方法の原型と言えるかもし
れない。

少し先走り過ぎたが、いわば文学論としての結論のあとには、「ド
イスレリー」や「ドーデー」がゾラよりすぐれていることが強調さ
れ、「ゴットシャル」がこの二人の小説を「寫眞小説」とよんでい
ることが述べられる。そしてこのあと、最後の節で医者として自然
科学者として真理の探求に没頭しながらも、なお文学の世界を樂し
むことを述べ、

「カルネリー」謂へることあり「イデアール」ハ吾黨の北斗
り而して吾黨の目的に非ずと讀者諸君よ彼の目的の爲めに北斗
を忘るゝの徒に與すること莫れ

と結んでいる。

以上、鷗外の論を殆ど逐語的に検討してみたわけであるが、その結果いくつかの事実がはっきりしたと言えるであろう。それを順番に数えあげてみると、

一、綿密に構成された論のようでありながら、実際には意外に論理的につながらないこと。

二、表現が抽象的であり、ことばの定義もなされず、比喩的表現に逃げるなど、実質的に何も言えていない部分が多い。

三、自然科学の方法を文学論に適用するに当って、論理のすりかえがある。

四、ゴットシャル、諸家など、権威をふりかざして論のバックアップをすること。

などなど、鷗外のその後の評論や論争における常套手段をすでにこの論に見ることができるのである。そういう意味でもまさに「小説論」は鷗外の文学上の実質的な出発点であったと言えるであろう。この論に対する当時の反響はほとんどあるいは全くなかったのではないかと、すではじめに推察したが、それは『小説論』が実質的にほとんど何も言えていないからである。このように何も言えていない論に対しては、当時の読者としてもつかみようがなかったのではないかと思えるのである。

「小説論」は、ゾラを否定している。しかし、これは鷗外が十分にゾラを理解した上での否定ではない。そうすると、この論を文学史的に見て極く初期におけるゾラの日本への紹介だとか、あるいはゾラ流の自然主義文学の否定がなされたとかいうような位置づけは

できないのではなからうか。まして、鷗外が後年の日本的な自然主義文学を予見しての警告であるなどという見方は見当がよいとい

べきであろう。

註

- 1 樟蔭国文学第14号（昭51・1）所載
- 2 比較文学研究第6号（一九五七、東大比較文学会）所載
- 3 一九六九・一〇・一〇、東京大學出版會
- 4 昭50・2・20、至文堂。なお、この第四章の1に相当する鷗外に関する論考の初出は、『解釈と鑑賞』第36巻第5号（昭46・5）の第10号（昭46・9）に「評論の系譜」（47）（51）として掲載されている。
- 5 たとえば山崎国紀著『森鷗外〈恨〉に生きたる』（講談社現代新書 昭51・12・20）など
- 6 比較的くわしい鷗外研究文献目録としては、近代文学研究叢書20（昭38・11・15 昭和女子大学）国語国文学研究史大成14（昭40・7・20、増補版昭53・3・24 三省堂）などがあげられよう。
- 7 本文の引用は讀賣新聞掲載の初出による。ルビおよび傍点の類は、すべて省略した。なお、初出の讀賣新聞は谷沢永一氏の御好意によりコピーを借覧できた。記して感謝の意を表する次第である。
- 8 クロード・ベルナールは、その著『実験医学序説』（本論に引用あるいは論旨を紹介する場合は、すべて三浦岱栄訳岩波文庫

改訳版（昭45改訳発行）に拠る）の第一編第一章「観察と実験
実験について」で「観察」と「実験」の定義と、それに対する諸学
説の紹介を行っているが、必ずしも対立するものとばかりは、
考えていないようである。ゴットシャルの紹介には、鵜外がと
ばしてしまった三ページ分にさらにくわしい説明があったかど
うか、筆者は未調査なのでわからない。

9 『実験医学序説』では次のように書かれている。

科学の探求においては、実に簡単な操作が最も大切であるこ
とがある。（中略）科学の最大真理は、実験的研究の末梢の
細部にその根をおろしているのであって、いわばこれらの末
梢の細部は、その中で真理が生長するところの土壌である。

これら探求方法の細部がいかに重大であるかを十分感じよう
と思ったならば、實驗室で教育せられ、そこで生活しなければ
ならない。（中略）病院、階段、講堂、實驗室、時には臭
気紛々たる場所、胸をさわがせるような場所で親しく自ら実
験を行い、艱難辛苦をなめるのでなかったならば、どうして
生命現象に関する真に有望にして光明ある一般論に達するこ
とができるであろうか。（中略）私の心境にふさわしい比喩
を与えてほしいというならば、これは、長いよこれた調理場
を通ることによつてはじめて到達することのできる光輝さん
らしたる客間であるという。

ここでは、「臭気紛々たる場所、胸をさわがせるような場所」
が、「病院、階段、講堂、實驗室」と並列に置かれている。

また、ここでは「簡単な操作が最も大切である」「これら探求
方法の細部がいかに重大であるか」を述べるために、「実験
室」などにおける生活の重要性が説明されているのであり、鵜
外による紹介とは、多少違っている感がある。

なお、ゴットシャルの論自体が、鵜外の紹介している内容に近
いように思われる。

10

ヨーロッパにおける住宅の形式がどのようにになっているかは知
らないが、客間に入るのに必ず台所を通るのであるうか。むし
ろ、台所などは通らないのがふつうではなからうか。また、客
間へ入る経路が一つとは限るまい。もしそうだとすれば、この
クロード・ベルナールの比喩はかなりピントはずれのものと言
えよう。

11

「解剖」が出て来たため、「刀鋸の鈍鋭」という比喩を用いて
解剖技術のすぐれていることを言っているのであろうとはわか
るが、「分析」が出て来ていることが「湯液の酸澗」とどのよ
うにつながり、何を言おうとしているかはよくわからない。

「刀鋸の鈍鋭を問ふことなし」と並べているので、分析のすぐ
れていることを言おうとしているのだらうという見当ぐらいは
つくが、「湯液の酸澗を擇ばず」がなぜ分析のすぐれているこ
とにつながるのか疑問である。むしろ方法がためだめだとい
うようにとれないこともない。比喩として適切とは思えない。

12

鵜外は、のち「追儼」の中で
一體小説はかういふものをかういふ風に書くべきであるとい

ふのは、ひどく囚はれた思想ではあるまいか。僕は僕の夜の思想を以て、小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだといふ断案を下す。（岩波第三次『鵑外全集』第四巻に拠る）

と書いてゐる。これをすなおに取れば、「小説論」において否定した自然主義文学の方法も許容されるのではなからうか。とすれば、鷗外の小説観にも変動があったことになる。

13 注3の『若き日の森鷗外』における森鷗外の註釋が富み大書
14 たとえば、山崎国紀氏は注5の著書の中で、

ゾラの『実験小説論』が本格的に日本の作家に影響を与えたのは、明治三十年代の初期であり、この評論は鷗外の前衛性を示したものであった。

と書いている。「前衛性」などということばの使い方にも疑問はあるが、鷗外に対する買いかぶりと言えよう。

「近世文學」一類の著者として著述の最期まで、本邦